
飴色將軍と甘藷侍女

魚日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飴色将軍と甘蔦侍女

【Nコード】

N8385W

【作者名】

魚日

【あらすじ】

え？仲よくしようぜって・・・何言ってるんですか。いくら姫様と仲がよろしいといってもですね・・・。っ！・・・廊下をそんな恰好で歩かないでください！ってか、将軍は陛下の“恋人”でしょうがー！ー！！男色王と書籍王妃内の人物の話です。相変わらずボーイスラブ要素は皆無。男色王と書籍王妃を読んでから読んでいただくことを推奨します。

1・主の婚約（前書き）

男色王と書籍王妃を先に読んでいただくことを推奨いたします。
時期的には男色王3話の後。

1・主の婚約

すらりとした細身な身体。

柔らかく、風に乗りそうな髪。

そして何より、優しい笑顔。

それが、私の理想の男性。

「いつ?!」

「おお、あんたか。」

「き、きやあああああつ!?!?!?!」

目の前にある分厚い胸板、引き締まった腹筋。

違う、私の理想じゃない！
ってか、

服を着ろー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！！！

「悪かったって。機嫌直してくれや。」

目の前にはちゃんと服を着てくれた大男が座っている。

「。。。。」

彼はなにも答えない私の扱いに困っているように見える。

叫んでいると周囲の視線が集中するのにいたたまれなかったのか、
デイナーバ將軍が私の口を塞いですぐ近くの部屋に引きずり込まれ

た。

落ち着いてきたころ、どうやらここはディノーバ將軍の私室なのだと理解する。

そもそも廊下で上半身裸って、どういう事?!

しかも叫んだ私の方が珍しいというか、変な人間みたいになってるし……。

……おかしい。

……しかもこれ初めてじゃないし。

ディノーバ將軍に廊下で会ったのは今日が初めてだけど、それまでも何人かの男性の……裸……あ、上半身だけだけど!……見てて……。

個人的にはやな感じだけど……慣れてる……つもり、だった……けど。

……正直、驚いた……。

……だって、いきなりだったし……。

コンコン、と扉を叩く音が聞こえ、ディノーバ將軍がため息をつく。

「……あー、……まあ、いいか。」

ガチャっという音がして、扉をディノーバ將軍が開けたのだと分かった。

「……?」

来客なのか、しかしなにも言わないので不審に思っ振り向くと、扉のところで顔を真っ赤にさせて立っている男性が目に入った。

「・・・陛下?!」

顔の赤い男性は、この部屋の主の恋人で・・・自分の主の婚約者であるテロルゴ国王ゾロディアス・ファガース・テロルゴ陛下だった。

私は、動けずに部屋を出たすぐ近くでしゃがみこんでしまった。

・・・噂に聞いていた。

陛下が男色であること。

本当だと、姫様に告げたこと。

・・・デイノーバ將軍は陛下の“恋人”であること。

わかってはいた。・・・わかってはいたけど・・・。

「・・・実際に目の当たりにするとキツイわね・・・。」

独り言に帰ってくる言葉は当然ない。

細かく言うと、実際の『交際中』を見ているわけではないけれど・・・

。。

「……陛下のあの顔は……。」

本当に、噂通りの人物。

少なくともそう解釈して問題ないはずだ。

……噂を認めてるのに、恥ずかしいのね……。……きっとデ
イノーバ將軍にしかみせない顔をしていたのだわ……。

使用人の一人としては、まずいことをしたという感覚がある一方で、
姫様にお仕えする側としては、この真昼間から何してやがるんです
か、と思わずにはいられない。

姫様は、本当になんでわざわざあんな噂持ちの国王に嫁ぐ気になっ
たのだろう。

祖国で……

7

「……テロルゴから……?」

「ああ、婚姻の申し込みがあった。……アルティアライン、噂は
知ってるな?」

「男色王、ですか……。」

「お前を嫁にやってまで欲しい利益はない。……断るか。」

「……いいえ、兄上。行きます。」

「……おう、いつでも出戻ってこい。」

なんて、ほんの少しの時間で即決してしまった姫様のお心がいまだ

に理解できないわ。

陛下も陛下……。なんで、『いつでも出戻ってこい。』なのよ……。

……それにしても……テロルゴ国王……。

……あれが……姫様の婚約者???

2・膝枕（前書き）

お気に入りありがとうございます！
今回は短いです。

2・膝枕

……………のヤロウ……………!!

あの時ほど私は人を消したいと思った事はない。

「ライザック様は、お仕事をされてるんですね。」
姫様、そんな可愛い顔して首をかしげないでください。
男はみんなオオカミです。

腹が立つて仕方がないのに、この状況下を力づくでどうにかするこ
ともできない。

「アルティアライン様、こちらに兄上がッ……………!!」
……………いいところに来てくれました、アルバート様。

「……………ミラさん、ポネーさん……………」

そんな、何で止めてくれなかつたんだ、みたいな顔しないでください。

「……私はお止めいたしました。」

そもそもなんで書庫に行つて帰つてきたと思つたら、ディノーバ將軍の頭を膝に乗せてるんですか、姫様。つてか、なんでなに気持ちよさそうにされてるんですか將軍。

アルバート様にさつさと回収されていつてしまえ。

「……冗談はここまでにします。ディノーバ・ライザック閣下、陛下がお呼びです。至急執務室まで」

「……わーつた。じゃな、姫さん。また来んぜ」

ディノーバ將軍はアルバート様と一緒にポネーの開けた扉から出て行こうとする。

よし、これで平和になる。

心の中でほくそ笑みながら、侍女らしく礼をして二人が通り過ぎるのを待つ。

「あんたも、またな。」

驚いて思わず振り返ると、二人はもう扉を過ぎた後だった。

一番近い位置に居たポネーも聞こえなかつたようだ。

……分らない。分らない、人。

「んで？……用件は？」

「ああ、例の件ですよ。こちら側につく貴族は全員納得したようですが……どうやら、反対派ではあの方が一番面倒ですね。」

「どうやって懐柔しましょうか？、と弟は半分面白そうに、半分面倒くさそうにこちらを見た。」

「ああ……先代の弟君……今は公爵だったか？頭の固い爺さんそのものだよなあ……。」

「めんどくせ、と呟くとアルバートは苦笑した。」

「誰が聞いているともわかりませんから、廊下で言わない方がいいですよ？」

「それ言ったら、例の件なんていうもん自体話に出すなよ。人の気配もないし、つてかここミシエルの部屋の近くじゃねえか。……大丈夫だろ？」

「多分、と付け加えながら、あくびをする兄にアルバートは思い出したように手に持っていた本を差し出した。」

「そうそう、はい、これ。頼まれてた本です。でも、兄上が仕事以外に本を読もうとするなんて。……しかも恋愛小説だし。」

「弟がこの本の作者の作品をすべて持っている事は知っていた。だから、すぐに用意してくれるとは思っていたが……。」

「まあな、ちよつと。……別に急ぎでもなかったんだけど。悪いなじゃ、貸りてくな。」

「いいえ、最近……あれ？もしかして、そういうことですか？兄上。」

「しまった。アルに貸りるべきではなかったか。ライザックは瞬間的にそう感じた。」

「この弟は周りの空気を読むのが恐ろしくうまい。」

「そして、相手の腹の内を悟るのも。」

「……まあ、いいじゃねえか。なんでも。」

「何とかその場の空気を流そうとする。」

「ええ、いい傾向です。上手くいって下さいね。僕も彼女なら大」

賛成です。」

にこのこと自分より前を歩く弟を苦い思いで見る。

……いい弟だよな。全く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8385w/>

飴色將軍と甘蔦侍女

2011年11月27日06時04分発行